

支援対象者の基本情報

- ・ 年齢・性別：50代・男性（以下D氏）
- ・ 障害種別：知的障害・精神障害
- ・ 障害者手帳の有無：精神障害者保健福祉手帳3級（入所中の更新で2級に変更）、療育手帳（出所後に取得）
- ・ 既往歴：うつ病、不眠症、吃音
- ・ 家族構成：父、母、きょうだい3人が健在だが、複数回の服役により関係性が絶たれ、実質的には身寄りがない状態。
- ・ 支援前の状況：生活保護制度を利用。単身生活。過去に職場の寮などでいじめに遭い、そこから飛び出して金銭が尽き、窃盗（置引き）に及んだ経緯がある。
- ・ 支援前の生活課題：金銭管理。複数回の服役歴があり、再犯リスクや生活の再構築に課題がある。

支援内容

■ D氏が抱える生きづらさ（アセスメント・見立て）

D氏は吃音があり、控えめでオドオドした様子であった。過去にはいじめを受けた経験があり、対人恐怖が強かった。対人関係構築が困難であったため、**出所後、自立準備ホーム等の中間施設の利用を挟むと人間関係が分断され挫折につながるおそれがあった。**

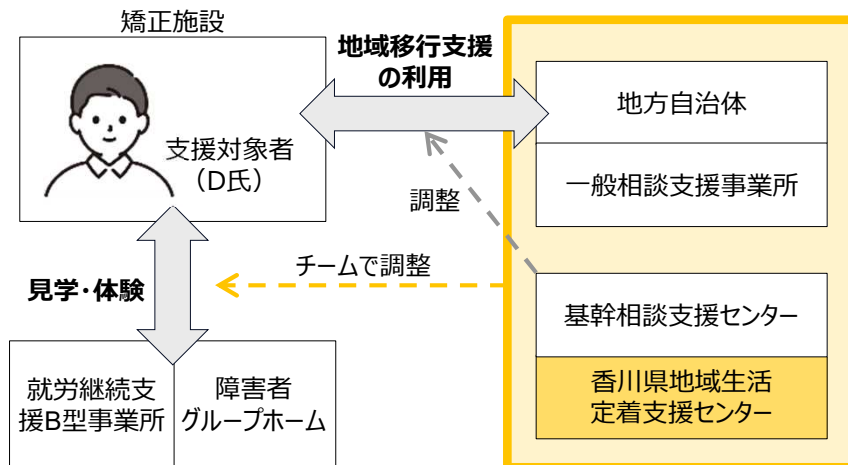
■ 生きづらさを解消するための支援

出所と同時に福祉サービスを受けて生活をスタートできることを目指し、**受刑中に「地域移行支援」サービスの利用を開始**して生活環境の調整を進める方針とした。受刑中は地域移行支援の要件に基づき高頻度（4か月で11回）で面会し、少しずつ信頼関係を築いた。また、出所後の生活の場を**D氏が直接見て、体験して選ぶことができるよう**、出所前に障害者グループホームや就労継続支援B型事業所を見学・体験する機会を設けた。

■ 今後の支援の方向性

現在は生活が落ち着きつつある。今後は、地域の支援者が支援の中心となり、地域の支援者をセンターがバックアップする体制で支援を継続する。

■ 支援体制図



センターの基本情報

- ・ 職員数：常勤4名、非常勤2名
- ・ 有資格者：5名（うち、社会福祉士1名）
- ・ 職員の主な保有資格：介護福祉士、相談支援専門員（法人内の基幹相談支援センターと兼務）
- ・ 運営主体：社会福祉法人 竜雲学園（2010年受託）
- ・ 受託法人の強み：県内で歴史ある法人で知名度が高い。高齢・障害領域で複数の施設を運営している。法人内で基幹相談支援センターを受託しており相談しやすい。
- ・ 地域の特徴：県内の移動距離が比較的短く、対面支援が実施しやすい。

どのようにして「地域移行支援」の利用に至ったのですか？

- 出所と同時に福祉サービスを受けて生活をスタートできる方法がないかをセンター内で検討し、地域移行支援の対象者に当てはまることを確認しました。**まずは基幹相談支援センターに相談しました。その後、市職員と条件を丁寧にすり合わせ、障害福祉サービス受給者証の発行に至りました。**

受刑中の施設見学で苦労したことは？

- **刑を終えていない者が地域の事業所を見学すること自体、事業所側に心理的な抵抗があります。**また、安全確保の理解を得る必要がありました。刑務官の事前訪問による安全確認等を通して、事業所側の疑問の払拭に努めました。
- 最大の困難は、**「矯正施設のふつう」と「福祉施設のふつう」とのギャップ**でした。矯正施設では、見学にあたり逃走経路の確認や複数名の刑務官の同行など、1～1.5か月を要する厳格な手続きが必要です。一方で、福祉施設は「次週の候補日を教えてほしい」というスタンスが一般的であり、この調整は苦労しました。

多機関連携で得られた成果・効果は？

- 矯正施設入所者の地域移行支援の利用と受刑中の福祉施設見学は、どちらも市内で初めての試みであったため、関係機関で1つ1つ確認、さらに再確認が必要でした。センターは関係機関の緩衝材として、双方の主張を丁寧に拾い、「ここは折れてほしい」「ここは譲れる」といった妥協点を双方に示しながら調整しました。
- 初めての試みで大変な面も多かったですが、この地域で**矯正施設—福祉—地域が連携する新たな枠組みが形成**されました。
- D氏は、当初は複数の支援者に壁を作っていました。少しずつ支援者との信頼関係を育み、自分の意見も伝えられるようになっていきました。